

# 講師 市橋 章男 氏

1954年岡崎市生まれ。國學院大學で史学を専攻。教職員を退職した後に故郷岡崎にかかわる歴史・人物の著作活動を始め。新編岡崎市史調査員。岡崎ふるさと塾歴史教室主宰。岡崎ふるさと歴史講座開催。

## 家康公を支えた主な三河譜代たち ～三河から全国へ、主な譜代家臣たちの足跡～

### 【講演要旨】

六ッ美西部小が新設校として開校した時、私は校務主任で赴任いたしました。赴任時、“六ッ美は人の関係が濃密なところだから”と言われました。作左の劇をやったこともあります。今は立派な学校になっています。なつかしい想いです。当時は大変お世話になりました。



今日は、三河譜代がテーマです。どの時代の三河譜代をとりあげるかですが。

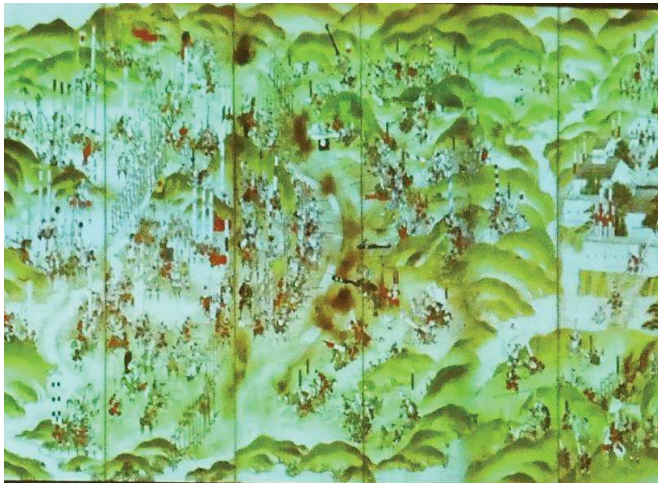
(スライドの)最初は「長篠合戦屏風」です。これは、徳川美術館のものですが、犬山白帝文庫のもの比べると、犬山の方がわかりやすいです。長篠合戦屏風は同じ構図で5種類あります。大阪城のものは、首がとれた絵とか、ちょっとひどいところも。犬山白帝文庫のものが一番わかりやすいです。

研修旅行で犬山城へ行くそうですが、犬山城白帝文庫は三河武士の遺産の宝庫です。城主であった成瀬氏は、岡崎の真宮町の出身です。白帝文庫には、犬山藩初代藩主が犬山城に移っていった時に持っていった資料が展示されています。小牧長久手合戦図屏風もあります。

「長篠合戦屏風」

徳川美術館 所蔵

犬山白帝文庫 所蔵



### ◆三河武士とは… 司馬遼太郎

司馬遼太郎が、…この人は家康が嫌いなんですが…「霸王の家」という小説の冒頭で三河武士について、

○三河は大半が山地で、…人よりも猿の方が多い。と尾張衆から悪口をいわれるような後進地帯であった。  
○犬のなかでもとくに三河犬が忠実なように、人もあるじに対して忠実であり、城を守らせれば無類につよく、…

と書いています。こんなところの武士たちが、なぜ天下をとれたのか、というのがテーマにあるようです。

まず、岡崎城は攻められたことは一度もありません。(それに三河犬っていませんよね) また、その時代の武士は主君に忠義をという時代ではなかった。忠義という言葉もなかった。そういう考えを広めていったのは家康で、家康が国を統治するために(江戸時代に)朱子学を取り入れたのです。徳川十六神将というのは江戸時代になってからのことです。ただ、その考え方を三河時代から実践し、民政を担当させたのが三奉行であり、その一人が本多作左衛門です。そのおかげで良くおさまったのです。

(忠義について、その時代の例を言えば)武田家では、信玄には仕えましたが、勝頼の時代になると、次々に離反したのです。忠義の臣であれば武田家を守るはずです。

三河でも一向一揆がありました。その時、一向衆門徒の家臣が信仰心から一揆方に加わり、家康に歯向かいました。家康はその家臣を断罪するつもりでしたが、進言を受け入れ、帰順した家臣を許しました。このことで家臣の心をつかんだのです。

〔参考；一揆側につき許された家臣…本多正信（のち参謀）・本多正重・松平家次・蜂屋貞次（のち十六神将）・渡辺守綱（のち十六神将）・酒井忠尚・夏目吉信（身代わりになり三方ヶ原で討死）など〕



このように、彼らは“忠義の臣”ではなく、自らをしっかり守ってくれる主についていく、それが御家を守っていくということなのです。個人のリーダーシップについていくのです。

こうして三河武士は、ずーっと家康についていき、江戸時代に藩ができる、180藩の藩主となり、三河武士が全国各地の町を作っていたのです。

### ◆実は、三河は尾張より発達していた。

源頼朝が全国支配の中で重要視したのは、「鎌倉」と、ここ「三河国」でした。だから、弟の源範頼を国司（三河守）にしています。上地八幡宮を創建したのは範頼（のりより）です。そうしたことから、この時代には三河は尾張より発達していたんです。

足利氏は鎌倉時代より三河国に領地を持ち、矢作川中下流域を中心に一族や家臣が根を下ろしていました。足利尊氏の母、上杉清子も日名町（日名屋敷）に住んでいたんです。

足利氏の一族や家臣の中から、足利から、領地の地域の名前を名字にした氏族が多く生まれています。仁木氏、細川氏、一色氏、吉良氏、今川氏、上地氏、戸賀崎氏（戸崎氏）などです。その一族が後の三河武士の源流ととなっています。

尊氏が室町幕府を開くと、三河は幕府の直轄地として更に栄えました。

この頃、『三河守護』には足利家執事であった高師直一族の、①「高師兼」が任命され、屋敷は菅生にありました。

尊氏の弟の足利直義は政治家であり政務の総括者でしたが、尊氏の信頼の厚い、高師直が執事として力を持つと、2人は内部で対立することとなりました。最初、尊氏は師直方についたのですが、結果、師直は殺害されて高氏は滅亡しました。

その後、三河守護は尊氏の信任が厚かった、②「仁木義長」が任命されましたが、5カ国の守護職を兼任するなど、権力を持ちすぎて、尊氏の死後、追われて伊勢に逃れました。子孫が榊原を称し三河に移りました。（そのまた子孫に榊原康政が）

### 「三河守護」の変遷と幕府奉公衆の動き —松平氏が勢力を拡大した契機

高師兼（師泰）（1337~1351）

足利將軍家の奉公衆（直属の武士）。館を菅生郷に構えていた。足利直義（尊氏弟）と執事である高師直の対立（親応の擾乱）により高一族は滅亡。一族の女性「明阿」により惣持尼寺が建立された。

仁木義長（1351~1360）

尊氏の信任が厚い仁木氏が守護職に。伊勢・伊賀・志摩・三河・遠江の守護職を兼任する。尊氏死後は排斥する動きが高まり伊勢国に逃亡。権勢を失う。子孫が榊原姓を名乗り三河国に移った。



三河国（岡崎）は、源頼朝（鎌倉幕府）や、足利尊氏（足利幕府）の重要な拠点であり、密接なつながりを持っていました、そして徳川家康を生んだことなど、この地域はすごいところでなんです。



京都神護寺 蔵

皆さんは、学校で、右は「足利尊氏像」左は「源頼朝像」と教えられたはずですが、しかし、違ったんです。右は『高師直』です。左は尊氏の弟の『足利直義』です。

⇒尊氏像でない理由は、①馬具に描かれている家紋は足利家の家紋ではない。②画像の上部に尊氏の息子の花押が書かれている。尊氏を下にするわけがない。では誰なのかというと、家紋から高師直だと思われれます。

歴史は変わります。歴史を固定化して見てはいけません。（歴史認識は時代によって変わりうるもので）固定化すると戦争がおこります。



京都国立博物館 蔵

## ◆総持尼寺と築山稲荷 … 明阿から尊氏への手紙

高師直の兄弟で高師泰の娘で、高師冬の妻であった、明阿は、滅亡した一族の菩提を弔うための寺院の建立を決意し尊氏に手紙を書き願い出ました。

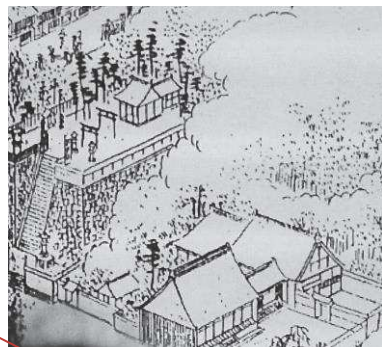
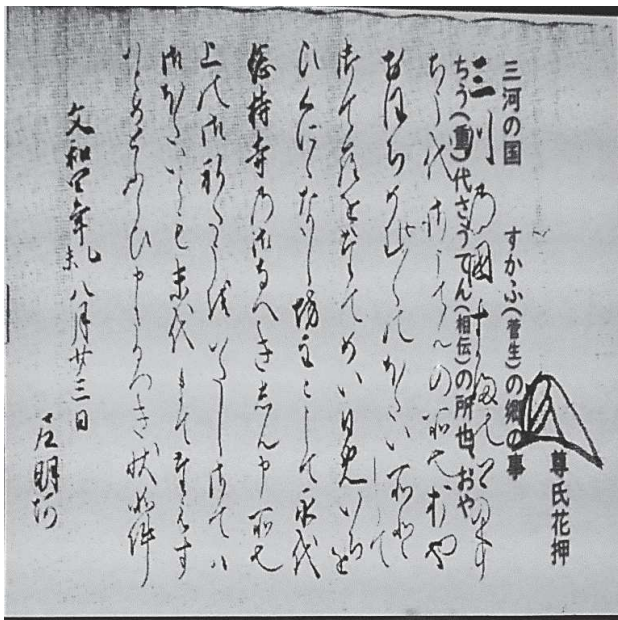
⇨師泰の生前に自身が譲り受けていた菅生郷を菩提所として建てる総持尼寺に寄進したい（将軍に返納し寺を建てたい）

尊氏は感激し、明阿に対して申し出に賛同する書状を送っています。

総持尼寺は現在の籠田公園の南に建立され、姪の「いち」を剃髪させ住持としました。

⇨石川貫河堂の描いた、当時の総持尼寺と築山稲荷です。

1927年（昭和2年）に、甲山中学校の下（中町）に移転しましたが、隣の築山稲荷も一緒に、全く同じ形で建てられました。



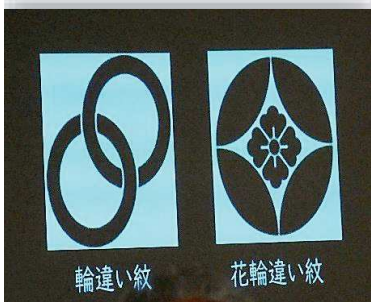
「築山」でお気づきになられたと思いますが、徳川家康の正室であった築山御前は、総持尼寺に住んでいたのではないかと思います。築山に住んでいたのが築山御前と呼ばれたのです。



## ◆家紋について

⇨「輪違い紋」は、高氏の裏紋です。  
「花輪違い紋」は、高氏の表紋です。

尊氏像と言われていた絵に描かれていた紋は、この花輪違い紋です。だから、あの絵は尊氏でなく、高師直だということになったのです。



表紋（定紋・本紋）…正式用いられる。苗字と同じように代名詞的に理解される。  
裏紋（替紋・別紋・副紋・控紋）…用いる家ごとに使われるルールは違うよう。  
武家ではほとんどの家が複数の家紋を持っていた。

## 岡崎城の古代瓦

築造当時の古瓦は見当りませんが、それ以後のものは、多種多様、相当数出土していますので、城と歴代の城主を偲ぶ事が出来ます。

その一 三葉葵  
永祿年間（一五六〇年頃）数十年間、徳川家康公在城、自ら設計増築した当時のもので、現在品中最も古いといわれています。後の葵紋の原形をなすものとの事であり、昭和復元の岡崎城にはこの紋様瓦が採用されています。

その二 立沢浮  
立沢浮は、水野家の紋、同家は正保二年（一六四五年）より七代百十八年間在城しました。

その三 立葵  
立葵は本多家の紋、同家（平八郎忠勝公を祖とさる）は明和六年（一七六九年）より六代約百年在城しました。

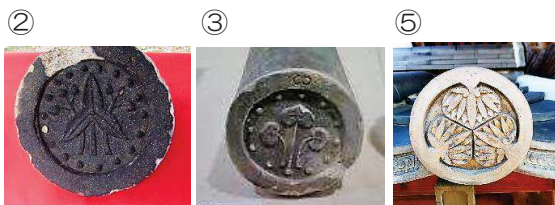
その四 輪違  
輪違は、本多家の裏紋であります。

その五 三葉葵  
この三葉葵は（変形はありますが）徳川家及関係親属関係保寺社等が用いたものであります。

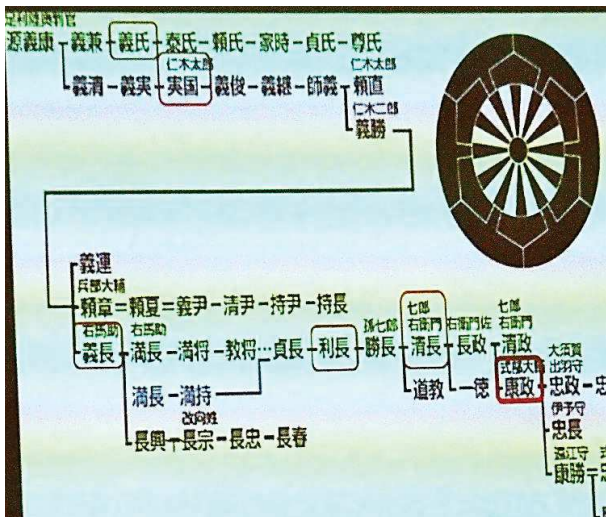
（岡崎市文化財保護委員 松井忠雄氏）

城の瓦には歴代城主の家紋が入っています。岡崎城の瓦にも家紋が見られます。徳川家の家紋は三葉葵ですが、岡崎城には、“葉脈”のない三葉葵が見られます。これは、家康が若い時に考案したものと言われます。土堀の瓦にも見られます。 \*参考 ①

⇨その四の紋は、本多の裏紋ですが、輪違い紋は高氏の裏紋と一緒にですね。 \*参考



## ◆松平氏が勢力を拡大した契機



榊原氏（榊原康政）の家紋は、源氏車です。  
 ⇐榊原氏の系図ですが、三河守護の仁木義長(②)を先祖とし、その仁木氏は足利(清和源氏)です。

(武家の棟梁である征夷大将軍は、源氏がふさわしいということから)清和源氏であるという系図を作った徳川家康が非難されていますが、武士は、系図を作ってもらっていたんです。信長も秀吉もです。なぜ、家康だけが責められなければいけないのでしょうか。

仁木義長の次の三河守護は、関東の新田一族の、  
 ③「新田(大島)義高」でした。この在任期間に、松平郷に高月院が再建されました。

新田に関わりがあり、この地に縁の深いのが、宇都宮泰藤です。泰藤は新田義貞に従い越前で敗れて、上和田に入りました。宇都宮氏は後に、宇都・宇津・大窪・大久保と姓が変わり、上和田の大久保氏になりました。宇都宮泰藤が大久保氏の源流なんです。

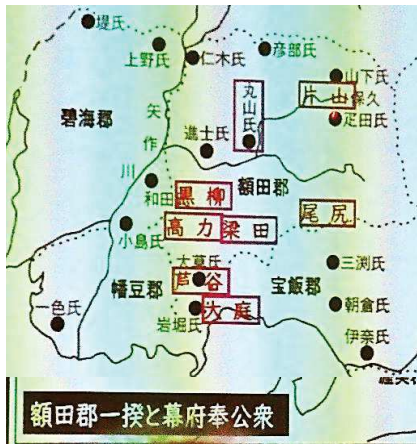
宮地町の犬頭神社には新田義貞の首塚があります。これは、宇都宮泰藤が、京都より奪って来て、ここに埋めたものだと言われます。各地にいろいろな首塚がありますが、この新田義貞の首塚は本物です。

大島義高のあとの守護は、④「一色氏」(範光・詮範・満範・義貫)です。在任中に南北朝の合一がなされました。

**新田(大島)義高(1360~1379)**  
 関東の新田一族である新田大島義高が守護に抜擢された。この在任期間に松平郷に高月院が再建され、南北朝の争乱で新田義貞に従っていた宇都宮氏が上和田に入った。宇都宮氏は大久保氏の源流(諸説あり)。

**一色氏(1379~1440)**  
 在任中に南北朝の合一がなされる。足利義満による全盛期を迎える。天恩寺の建立など市域の仏殿建立が見られる。

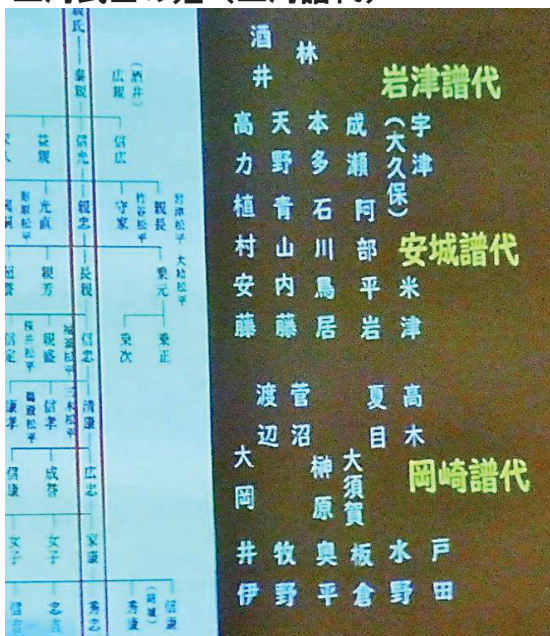
**細川氏(1440~1478)**  
 守護代である西郷氏が竜頭山に砦を築く(現在の岡崎城)。吉良氏の被官衆や、不満を持つ地元の奉公衆によって一揆が起こる。西郷氏に代わり松平信光が鎮圧、西三河一円に勢力を拡大する。応仁の乱の勃発後に起きた井田野の合戦では松平親忠が一族を結集して加茂の豪族に勝利する。伊賀八幡宮、大樹寺の建立。



次の守護の、⑤「細川氏」(持常・成之)ですが、細川氏は京都に住んでいました。この時代に、守護代であった西郷氏が竜頭山に砦(後に岡崎城)を築いています。

1465年に(不満武士の反乱である)額田郡一揆がおきましたが、松平信光が反乱を平定した地域をもらうという条件で、これを鎮圧し、松平一族発展の礎となりました。

## 三河武士の姓(三河譜代)



## ◆徳川創業期の譜代家臣たち

- 三河一向一揆で、家康の家臣団は分裂しました。家康は歯向かった家臣の首を全部切れと言いましたが、大久保忠俊の、“許せば、いざという時に命にかけて主君(家康)を守る”という懸命の説得を受け入れ、罪を問いませんでした。その結果、他の地域では一揆をおさめるのに何年もかかりましたが、三河一向一揆は半年でおさまりました。

家康は、二度と家臣団が分裂しないように、「三備の軍制」をつくりました。

### 『三備の軍制』

- ①「西三河旗頭」②「東三河旗頭」に命令系統を整備。松平一門衆などの内紛を防ぐ。
- ③「旗本先手役」の創設。一人に50騎ほどの与力。自由に動く機動部隊。旗本のルーツ。

三河一向一揆後の家臣団

### 『三奉行』…内政の充実(民政や訴訟などを担当)

“仏高力、鬼作左、どちへんなし(かたよらない)の天野三兵”  
 三備の軍制で問題点があります。嫡子の信康がいなかったことです。信康は岡崎城主だけに、置き場がなかったんです。岡崎で、家康の代わりに様に振る舞い、命令系統を乱し、石川数

正・酒井忠次を困らせました。このことを信長に目をつけられました。がっしりした軍制を、知らず知らずのうちに壊してしまったことが、信康事件の背景になるのです。信康退去後の岡崎城代は、本多重次(作左)です。